

巻 頭 言

理事 松澤 勝

((独) 土木研究所 寒地土木研究所)

今年から、北海道支部の役員体制が変わり、従来の幹事を廃止し、理事自らが支部の活動を行うようになりました。これに合わせて、幹事長のポストが無くなり、総務担当主任の理事が従来の幹事長に相当する役割を担うことになりました。ところで、今まで巻頭言は、主に、支部長と幹事長の持ち回りで寄稿しておりましたが、このような理由で今回、僭越ながら総務担当主任の理事である私が巻頭言を記すこととなりました。

さて、今年度は27件の発表がありました。昨年度とほぼ同数で、北海道で活発に雪氷研究が行われている様でうれしい限りです。但し、発表者の所属機関を見ると、寒地土木研究所と北見工業大学で、発表件数全体の半数を占めており、他の機関からの発表も今後、期待するところです。

ところで、一昨年度から「北海道の雪氷」も電子版となり、希望者のみ冊子を販売する形を取っています。そのため、あまり目に触れなくなったかもしれませんが、今年度も、「北海道の雪氷」の表紙を飾るのは、故福沢卓也会員の題字と斉藤新一郎会員の版画です。斉藤新一郎会員は、毎年、北海道支部研究発表会で発表されているので、皆さん、よくご存じでしょうが、福沢卓也会員のことを知らない方もいらっしゃると思います。福沢卓也会員は、平成3年に、北海道大学大学院理学研究科修士課程を修了し、北海道大学低温科学研究所の助手に採用されました。彼は有能かつタフな男で、弱層の形成メカニズム、特に、積雪表面直下にできる、しもざらめ雪の研究を行っていました。私は彼と同期で、2つ隣の実験室にいましたが、彼の卓越した研究への見通しや取り組み、実験のアイデア、また、フィールド調査での統率力、手際の良さ、どれを取っても優れたものを持っており、雪氷研究のために生まれてきたような男でした。将来を期待された雪崩研究のホープでしたが、悲しいことに、1994年に、海外登山中にそのまま行方不明になってしまいました。雪崩に巻き込まれたと言われています。彼が生きていれば、北海道支部の中心メンバーで活躍していたかもしれないと思うと残念でなりません。

とりとめのない話になりましたが、研究会の会場で高橋修平先生がおっしゃっていたように「継続は力なり」です。福沢君が記した「北海道の雪氷」が、今後も継続して発刊できるよう、雪氷学の研究を盛り上げていきたいと考えています。